
魔法少女リリカルなのは ～太陽龍とブレイヴ～

ブレイブマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～太陽龍とブレイヴ～

【Nコード】

N9608T

【作者名】

ブレイブマン

【あらすじ】

夢を見る。それが何を示すのか僕は知らない。そんな時出会ったのは魔法と絆^{ブレイヴ}・・・
そして何かが始まる。

この小説は基本原作寄りです。感想がございましたらよろしくお願いたします。

タイトル変えますた。

プロローグ 夢と始まり（前書き）

この小説はバトルスピリッツとリリカルなのはのコラボレーションのつもりです。

オリ展開もございますが、基本原作寄りでございます。

バトスピがわからなくても良いように特定のスピリットしか出しません。

あと作者の都合で書き方が変わるかも知れません。

ではプロローグが始まります。

プロローグ 夢と始まり

夢を見ていた……

いつも見る夢……

前世の記憶とかただの妄想の夢なのかはわからない

でも僕はこの夢を見るのが嫌いだった……

廃墟の中心に

赤毛の青年と紫色の髪の青年が立っている

「なんでこんな事をするんだ!!」

また……赤毛の青年は問いかける。

そして答えは決まってる。

「人間に復讐する為だ……」

紫の髪の青年はとても辛そうに答える。

「なら何故同胞を殺した！」

周りを見ると沢山の死骸・・・

それは人や龍、他にも色々な死骸が転がっている

「こうでもしないと十二宮が手に入らないからだ」

十二宮・・・何回聞いても解らない。

「それに・・・なんで滅神の力をつ！」

「これも必要なんだ・・・所詮、超神の力は善の力・・・復讐するにはそんな力はいらん」

そう言い、拳を握る。

けれど赤毛の青年は必死に説得する

「今からでも遅くない！十二宮の力があれば
またみんなと一緒に・・・」

「それは無理だ・・・」

「っ!？」

「貴様が知っているのは我が悪の力を手に入れ、ここを同胞を殺し、
十二宮を手に入れた・・・それだけだろう？」

ここだ・・・このあたりで僕は何故か苦しむ。

「我はそれ以上の事をした。十二宮を見つけさせた仲間を殺し、研究者も殺し、そして・・・」

赤毛の青年は息をのむ。

僕は夢だとわかっていても悲しくなる。

「我と貴様の友・・・“ルナ”にも手をかけた・・・」

「っ!?!」

その名前がなんなのか僕は知らない・・・

でも赤毛の青年は信じられないと言う顔をする。

「あいつは我を止めようと決闘^{バトル}を仕掛けてきた。
そして我は返り打ちにし・・・殺した」

「っ!?!」

赤毛の青年は紫の髪の青年の元まで駆け抜け、拳を振るう

「ノヴァアアッ!!!」

「・・・・・・・・」

ノヴァと呼ばれた青年は無言で拳を受ける
しかし・・・

「ぬるい・・・」

「っ!?!」

瞬時にノヴァが赤毛の青年の首を絞める。

「ぐううつ・・・」

「貴様もルナと同じく『神』の名を持つ者なのに
その程度なのか・・・」

それともあの力が無いと何もできないのか？」

青年は必死に引き剥がそうとする
でも力が強いのか、中々外れない。

「それに我にもう一度など無い・・・」

ノヴァは悲しそうな顔を見せる。

「貴様を殺せばこの世界で我は一人か・・・
太陽と月の無い世界はどのような物なのだろうな・・・」

「くつ・・・」

必死に手を伸ばし、ノヴァに触れる。
そして・・・

「・・・ノヴァ・・・君がそこまで復讐を・
するなら・・・僕は・・・っ」

ノヴァに触れ、呪文を囁く

「・・・ポーラ・キャリバー！」

「っな!？」

囁いたと同時にノヴァの体から12枚のカードが飛び出す。
そしてカード達は黒い渦へと飲み込まれていく

「…………貴様……何故……っ!!」

「ぐはっ!!」

ノヴァが青年を投げ飛ばした。

そして僕にもわかる殺気と憎悪を撒き散らしながら青年に近づく

「我がすべてを捨ててまで手に入れた十二宮をっ!
…………貴様もルナの元へ送ってやるっ…………」

「…………君の復讐を止められたなら
僕はもう…………思い残すことはない」

青年はそのまま目を伏せる。

「消えろ、“アポロ”!!」

「ぐっ、あああああっ!!!!!!!!!!」

ノヴァが黒い光線を放ち、アポロと呼ばれた青年が飲み込まれる。

いつもそこで…………夢は終わりを告げる…………

（ちゅんちゅん）

小鳥の鳴き声と、太陽の日差しで僕は目が覚める。

「また・・・この夢か・・・」

夢は物心ついた時から見ていて

最初は両親も面白そうな夢だなと笑っていたが

毎日見ている事を伝えると即座に病院に連れて行った。

でも医者には特に異常無しと言われ、気にも止められなくなった。

「あと何回見せられるんだろう・・・」

多分一生この夢から出られないんだろうなあ

思い耽って時計を見ると・・・

「7時半っ!？」

驚きながらベットから飛び出し、
急いで制服に着替える。

「急がないと遅刻してしまう!」

即座に鞆を持ち、パンを銜えて家を出る。

「死ぬ気で走ればなんとかなるはず!」

そして学校へ全速力で駆け抜ける。

「正面突破です!」

プロローグ 夢と始まり（後書き）

いかがでした？

まあ、プロローグという事で軽め？ですね。

「……あの……」

どうしました？

「……僕の名前はいつ……」

次回で発表しますよ♪

「……そうか……ホッ……」

それでは感想がありましたらください。
では次回にまたお会いしましょう。

第一話 日常の後の不思議な出会い（前書き）

小説って書くの大変です・・・

でもやりとげてみせます。

なので指摘がありましたらどんどんください。

では、一話が始まります。

第一話 日常の後の不思議な出会い

僕はなんとか自分が通う学校『私立聖祥大付属小学校』通称『聖祥』に着く。

「はあはあ・・・ま、間に合いました・・・」

なんとか間に合い、教室に入る。

いつもと変わらない風景に気が滅入る。

机に座ると同時に担任の先生が入ってきた。

今日もいつもと変わらない授業になりそうだな・・・

「ねえ？」

「ん？」

昼休みになり、昼ご飯を食べていると声をかけられる

「なんだ、高町さんですか」

声の主は同じクラスの高町なのはさん

駅前の喫茶『翠屋』の娘さんで

この聖祥で人気のある女子のようです。

「なんだじゃないよ。君、今暇？」

「見ての通りです」

僕は今、弁当を食べている。

ん？弁当なんていつ作ったかって？コンビニに寄りました

ともかく暇じゃないのは一目瞭然・・・

「暇なんだね？」

「どこをどう見れば暇そうに見えますか？」

「暇って顔をしてるよ？」

いったいどんな顔ですか・・・

「いいから来て」

そう言われながら引きずられる

・・・どうやら今日は厄日のようです・・・

学校の屋上に連れて来られ何故か三人の女の子とお弁当食べている

一人は僕を連れ出した高町なのはさん

もう一人はアリサ・バニングスさん

成績優秀でしかもお嬢様

この子も当然生徒に人気の女子みたい

最後は月村すずかさん

こちらはバニングスさんと同じくお嬢様
さらにこの子も生徒に人気のようです。

なのに何故・・・

「何故僕は今日も連れて来られたんでしょう・・・」

この所は毎日と言っていいほどここに連れてこられている
本当に何故連れて来られるのかわからない。

僕は特に人気の生徒でもなければお金持ちでもない
運動も勉強も平均レベル、ただのつまらない男子生徒なのに・・・

「何でってあんたがいつも寂しそうにお弁当食べてるからでしょ？」

僕の独り言に突っ込んでくるバニングスさん

「それが理由になるならこの世に孤独という言葉は存在しませんが
？」

「そんな事は良いから早く名前を教えなさいよ！」

何にも脈拍のない質問がきた！？

まあ、もういつもの事です・・・

「確か最初に連れて来られた頃に言いましたよね？」

「そうだった？なの？」

バニングスさんが高町さんに振る。

忘れられてたんですか？

「うん、確か『望月^{もちつき} 陽太^{よった}』君だよね？」

バニングスさんはド忘れで高町さんはうる覚えですか・・・
月村さんはわかってましたよね？

「・・・・・・・・」

視線を向けると月村さんは無言でそっぽを向く・・・
忘れてたんですね？

あれ？何故でしょう？目に水が・・・

「そついえば今日の授業の事だけ・・・」

いきなり高町さんが言いだす。

「みんなはもう将来決まってるんだよね？」

「家はお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強してあと
を継がなきゃ」

「私は機械系が好きだから工学系で専門職がいいなあと思ってるけ
ど・・・」

「そつか・・・陽太君は？」

僕に振りますか・・・

そうですねえ・・・

「今の所なにも」

「私と同じだね」

・・・あれ？高町さんは翠屋の二代目では？
思った事をそのまま口にすると・・・

「それも未来のビジョンではあるんだけど・・・」

「けど？」

「やりたい事は何かあるような気もするんだけど
まだそれが何なのかはつきりしないんだ。
私は特技も取り柄も無いし・・・」

「ばかちん！」

バニングスさんが高町さんに怒鳴りながらレモンの輪切りを投げつける。

それはやりすぎでは？

「自分からそんな事言うんじゃないの！」

「そうだよ。なのはちゃんにしかできない事はあるよ？」

「そうですよ？理数系の成績はバニングスさんも上回ってますし・・・」

「

「なっ！そ、そんな事・・・」

「ありますよね？」

「くっ・・・」

と、とりあえずそのくせに取り柄が無いとはどの口が言っわけ！

「あわわわっ」

バニングスさんが高町さんの両頬を掴み引つ張る。

よく伸びますねえ、あんなに・・・

「だ、だってなのは、文系苦手だし体育も苦手だし」

「二人とも駄目だよ」

屋上にいた生徒が生徒が集まり始め、月村さんは必死に二人（正式にはバニングスさん）を止めようとする。

僕はというと

高町さんの伸びる頬を珍しそうに眺めていた。

(キーンコンカー・・・)

ホームルームも終わり、帰宅するだけとなった放課後
僕は・・・

「どうしてまた付き合われているんでしょう？」

高町さん達の帰り道に付き合わされていた
ちなみにこれも毎度の事です・・・

「いいじゃない。あんた暇そうだったし」

「もういいです。反論できないと悟りました・・・」

どうせ反論しても話しを逸らされるのでしょう・・・

「よろしい」

何がよろしいのかバニングスさんは笑顔になる。
女の子は本当に何考えてるんでしょう？

「でも高町さん達は塾に通ってますよね？」

「そうだよ？」

「だったら僕が付いて行っても仕方ないんじゃない？」

「途中まで一緒に来ればいいじゃない」

あ、ここが塾への近道よ」

そうきますか・・・

高町さん達が近道らしい道に入って行き、僕も入るのを余儀なくされる。

道はちよつとだけ悪いが仕方ない。

でも何で僕に構うのか聞きたいですね・・・
特に高町さんに
そう思っていると・・・

『《聞けばいいじゃない》』

「!？」

突然、声が聞こえた。というより入ってきた。
びっくりして周りを見渡すが居るのは高町さん達だけ

「どうしたのよ、二人とも
急に立ち止まったりして」

「今、何か聞こえなかった？」

どうやら高町さんも声が聞こえたらしい。

「聞こえました。

聞いてみればって」

「私は助けてって聞こえたよ」

高町さんは違う声を聞いたらしい。

バニングスさんと月村さんに聞いてみたら
聞こえないと答えられた。

高町さんはキョロキョロと辺りを見渡し・

―突然、走りだした

「「なのは（ちゃん）！？」「」

二人も高町さんを追いかける。

僕も走り、追いかける。

追いつくと高町さんがイタチ（？）を抱きよせていた
よく見ると怪我をしている。

「どうしよう」

「どうしようって・・・」

とりあえず病院！」

「獣医さんだよ」

「えっと、とりあえずこの近くに獣医さんってあったけ？」

「えっとあ、この辺りだと確か・・・」

みんな動揺している。

とりあえず早くこの子を獣医に診せないと・・・

「こっちです！」

みんなが僕の方を見る。

「こっちに動物病院がある。高町はその子を連れて急いで付いてきて！」

そう言いながら僕は走り出した。

なんとか動物病院（小さいけど・・・）に着いて
イタチ（？）を獣医さんに診てもらっていた。

「怪我はそんなに酷くないけどかなり衰弱してるみたいね
きつと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかなあ？」

「医院長先生ありがとうございます」

「「「ありがとうございます」「」「」

高町さんが先にお礼を言い、
僕らもそれに続く。

「いいえ、どういたしまして」

「先生、これってフェレットですよね？」

「フェレット・・・なのかなあ？」

変わった種類だけど・・・それにこの首輪に付いてるの・・・

「

イタチ・・・もといフェレットを見ると

首に赤い宝石の付いたペンダントを付けていた。

獣医さんが触ろうとした時、フェレットが起きる。
キョロキョロ辺りを見渡し、

「なのは、見られてる」

フェレットが高町さんの方をじっと見ていた。

「ああ、うん」

高町さんがフェレットに近づく。

そして指を近づけるとフェレットは指を舐めた。

「ふわ〜」

みんなが喜びの声を上げる。

だけどフェレットはまた寝込んでしまった。

「しばらく安静にした方が良さそうだから、
とりあえず明日まで預かっておこうか？」

「はい、お願いします」

三人は声をそろえて言った。

「よかつたら明日、様子を見に来てくれるかな？」

「わかりました」

また声が揃う。

狙ってやってるんでしょうか？

「うわっ、やばっ、塾の時間！」

「ホントだ」

「じゃあ、医院長先生、すみませんまた明日来ます」

そう言い、先生に手を振り、塾に向かう。

「結局最後まで付いて行っしまいました・・・」

最後まで高町さん達を送り届け、
今は帰路を歩いている。

帰り際にフェレットをどうするか考えておいてと
バニングスさんに言われ、考える。

「特に問題もないですが・・・」

あのフェレットは近づいてはいけない気がする。

というか高町さんになついてたっぽいし、その方がいいでしょう

「ん？」

そう思っていると道端にフェレットの付けていた宝石に似た
青いペンダントを見つけた。

「あのフェレットさんの落とし物でしょうか？」

それなら明日もどうせ高町さんに連れて行かれるから
その時に渡しましょうかね

そう考えながら僕は帰路に戻った。

第一話 日常の後の不思議な出会い（後書き）

頑張りました（、・ω・、）

辛いです。オリ主と原作キャラの絡みが辛いのです。

こうした方がいいよと言う指摘のある方や感想のある方はどんどん感想ください

「おつかれさまです。作者さん」

陽太君は僕のオアシスや

あつ、顔イメはバトスピのバ。ンくんの髪を黒くしたって感じです。

「元が元のだけにイメージし難いような・・・」

良いじゃん、敬語使うバ。ンくん

・・・萌えですよ？

「はぁ・・・そうですか・・・」

では、また次回もよろしく見てやってください。

第二話 話す宝石と守りたいもの（前書き）

「このタイトルと本文が全くあっていないような・・・」

仕方ないのです。思いつかないのです。

力不足なのです。欲しいパッケが売ってないのです

「最後のは関係ないよね!？」

とりあえず始まりマウス

「第二話、始まります」

第二話 話す宝石と守りたいもの

〔陽太 side〕

フェレットを病院で預かってもらったその日の夜・・・

「へー、あのフェレットは高町さんが預かる事になったんだ・・・」
自分の部屋で勉強していると高町さんからメールが届いて、
中を見ていた。

ん？アドレスはいつ聞いたのかって？

初日に連れて来られた時に押しつけられたんだよ・・・

「陽坊？ちょっと頼みがあるんじゃないが・・・」

いきなりジジイが入ってくる。

よく無断で入ってくるんだよね・・・

みんなもこうゆう人いるよね？

「勝手に入って来ないでください。くそジジイ」

「敬語を使いながらの侮辱とはなかなかやるのおwww」

「うるさい、だまれ、笑うな、気持ち悪いんだよ、くそジジイ」

「マジで凹むのお・・・」

だったら入って来るなと言う話だ

「で、何の用ですか、くそジジイ」

「おう、つまみが切れたから買ってこい！」

・・・は？

「いやあゝ、レ。スを十五回くらい狩ってたら切れてしまったのお
買ってきてくれい！おつりは全部やるぞ？」

そう言いながら千円を渡してくる。

ふざけんと言いたいが金をくれるなら何の問題も無い。

「わかりました・・・何買ってくればいいですか？」

「とりあえずレ。アを狩るから長く食えるものを買ってきてくれい」

「りょうかい」

僕はすぐ着替え、家を出た。

「ありがとうございました」

デキトーに買ってコンビニを出る。

つまみが高くてそんなに金が余らなかった・・・orz

「しかし大丈夫でしょうか・・・」

何が大丈夫かとはあのフェレットの事だ。

高町さんの家は喫茶店営んでるし、あとは食費もろもろでいろいろな悩んだ末・・・

「ある程度は手伝いましょうかね」

という結論に達した。

うん、我ながら名案です

《そんなに気になるなら自分が引き取ればいいのに》

「っ!？」

突然声が聞こえ、振り返る

しかし誰もいない。とうとう頭がおかしくなりました？

《こっちだよ、こっち

君のポケットの中!》

ポケットの中?中には確か・・・

ガサゴソと探ると・・・夕方に拾った宝石が入っていた。

《ふっ、やっと出られた。ひどいよう、ポケットに突っ込んでそのままなんて》

え？ええ？ええええええ！！！！

「じゃ、喋った！？」

《ん？ああ！この世界ではこんな事ないもんね》

ね♪じゃねええええ！！

何ですかこれ！？ドッキリ！？ねえ、ドッキリ！？

《それでは主？私に名前をお願いします》

します　じゃねえよ！・・・って

「主？僕は君の主になった覚えないんだけど・・・」

《ええっ！？でもでも、最近同じ夢とか見てますよね？》

！？・・・こいつ何で夢の事を知っている？

「同じ夢は物心ついた時からずっと見ているよ」

《えとえと、その夢の内容は？》

何故そんな事を聞くのだろうと思いつながら答える。

「何か、たくさん死体があつて、ノヴァと呼ばれてる青年とアポロ
って呼ばれた青年が

話しあつてゐる夢だ。結局アポロって奴は殺されるけど」

夢の内容を適当に答える。

嘘は言っていない。色々省いたが・・・

《なら問題ありません。あなたは私の主ですよ》

「いや、なんでそうなるのさ」

こいつは僕の夢の秘密でも知ってるのか？

《いずれわかります。今日から何かが変わってゆくかも知れませんが？》

んな簡単に変わったら苦労無いですよ・・・
やっぱり今日は厄日ですね

《そんなため息つかないで下さいよ・・・っ!？》

「ん？」

いきなり喋る宝石の声が止まる。

「どうかした？」

《大変です!!主っ!!!!》

うわっ、そんな大声出さないでよ。
びっくりするから

「何?どうかしたの?」

《どうもどうも無いです!向こうから十二宮の気配です!》

十二宮！？やっぱりこいつは何か知っている！

「十二宮とはなんですか！僕の夢の何を知っているんですか！」

何としても知りたかった。夢に出てくる言葉のどこかにこの夢から抜け出す

ヒントがあると思ったから、でも

《今は何も言えませんが、ですがいつかあなたは知ることができる。
その時まで待ってください》

「待てません！僕はこの夢のせいで・・・」

《急いでください！他にも反応があるんです！
しかもこの反応は主の友達のもんです！》

友達！？僕に友達なんて・・・
ああ・・・高町さん達の事・・・
だったら僕には関係ないですね。だから・・・

「さっさと場所を教えなさい！」

《主から見て、西の方向です！》

何という面倒な教え方！？しかも方角だと海鳴公園じゃないか！？
そう思いながら僕は、走り出していた。

「きゃああああ」

急いで公園に着くと高町さんが白い変な服を着て黒い何かに襲われていた。

「とりあえず聞きます。何ですかあれは!？」

《見ててわかんないなら相当のバカですねっ！
襲われてんですから助けたらどうですか!》

「でも高町さんが有利っぽいし大丈夫じゃ・・・」

と言っていると高町さんの背後からさらに黒い奴が迫っていた！

「まずい!」

このままじゃ高町さんがやられる！

：そしたら?：

死んじゃう！

：そうなたら?：

考えたくない!あの人は、あいつは僕を救ってくれた。
あいつは知らないかもだけど救ってくれたんだ!・・・だから!

：どうしたい？：

助けたい！

《なら私に名前を、そして力を解放して！》

「君の名前はルナ、ルナティック・ブレイヴだ」

《名称を登録、OKです。いつでも行けます！》

なら行こう！高町を助けるために

「ルナ！セットアップ！」

《セットアップ！》

体が光り、そのまま黒い物体に突っ込んだ。

〔陽太 s i d e e n d〕

〔なのは s i d e〕

「後ろです！」

フェレットさんの声で後ろを振り向く。

ええ！？もう一体いたの！？
や、やられるっ！

そう思い目を閉じる。

・・・だけど衝撃が全く来ない・・・
目を開くとそこには

赤い翼を生やし、大きな剣を持った
男の子がいた。

「なのはside end」

「陽太side」

光りが晴れると高町に似た服（色は赤がメイン）に半ズボンを着ていた。

あと変な所は・・・

「なんだこれは！」

赤い翼みたいのと赤色の大剣が装備されていた。

《文句言ってる暇があるなら早く助けたらどうですか！》

「言われなくても！」

そう言いながら高町と黒い奴の間に入り込み、
大剣で防ぐ。

そして一言言っでやる。

「俺の大切な居場所を傷つけた罪、その身で払え！」

・・・あるえ？口調変わってね？
まあ、いいか

「え！？陽太君！？」

高町が俺に気づく。

よし、ちゃんと名前を覚えてな

「高町！話は後だ！まずはこいつを潰す！
高町はそっちのもう一体を相手してくれ」

「う、うん。わかった」

そして黒い奴に振り返る。

こいつだけは潰す。徹底的に潰す。

《駄目ですよ。ジュエルシードですからあちらに渡さないと》

「おまえは色々知ってんのな・・・」

それなら少しくらい何か教えるよ・・・こっちは無知識だぞ

《とりあえずあちらは封印に成功したようなのでこちらもケリをつ
けますよ》

「なら切り裂く！アポロ！」

剣の名を呼び、それに答えるかのように剣が炎を纏う

「フレイム・テンペスターっ!!!」

そのまま黒い奴を切り裂いた。
すると黒い奴の体は消え、

中からちっこい宝石みたいのが転がってきた。

「こいつがジュエルシード？」

《そのようです》

「ならこれは高町に渡すか・・・っていねえっ!!」

いつの間にか高町は居なくなり、目の前にはボロボロの公園や道路があった

さらにパトカーのサイレンの音も聞こえてくる。

・・・俺、かなりやばい状況？

《とりあえず帰りましょう。明日も会えるんですし》

「そうだな、ここは退散しとくか」

俺はボロボロの公園や道路を後にした。

この後、帰ったらジジイにゲームを強制的にplayさせられ
夜中3時まで寝かせてもらえなかった・・・

第二話 話す宝石と守りたいもの（後書き）

「僕の口調変わってませんか？」

セットアップすると変わる設定デスヨ？

あと話に出てきた大剣は『極星剣機ポーラ・キャリバー』の
ブレイヴスピリット状態のあの剣の白い部分を赤くした奴と思って
くれれば
楽です。

「わっかりにく〜」

他にもいろんなブレイヴを出すつもりです。

あとなのはの思考はこんな感じで良かったでしょうか？
感想やこうした方がいいと言う方は感想ください
ではまた次回会いましょう。

第三話 変わり始めるもの（前書き）

作者「タイトル雑々www」

陽太「いや、自分の書いたものを侮辱するってどうなんですか？」

作者「この先どうしよ、とか思ったらきついのさ」

陽太「あと、最初の敬語はどうしたんです？」

作者「堅苦しいのは終了！おk？」

では第三話、始まります」

第三話 変わり始めるもの

僕はまた夢を見ている。

だけど今度の夢はいつも見ている酷い夢ではなかった

周りには廃墟の街ではなく森、しかも月が出ているから夜らしい。
そして目の前に夢の中でノヴァと呼ばれた青年と知らない白い髪の少女がいた

「今宵も月が綺麗だなあ、なあアポロ」

ノヴァが俺に向かって話しかける。

この夢の中では俺はアポロらしい

しかしこの夢のノヴァは怖いほど優しい顔をしている

いつもの夢のノヴァは復讐の為なら友をも簡単に殺す奴だったが・
今のノヴァは復讐のふの字も見当たらなかった。

「当然だよ！なんせこの『月光神龍』ルナ様の月なんだから当然だよ！」

と、白い髪の子が自信満々に言う。

ルナ・・・僕のデバイスと同じ名前だな

「だけどルナ？君はまだ力を制御できてません。だからもっとたくさん
さんの

仲間を集めて・・・」

「ああゝもうっさい！アポロの説教なんて聞きたくない！
仲間だつてシャークやフェニックスがいるもん！」

「全部僕の仲間でしょうが・・・」

「はっはっはっ！大変だなあお前らww
まあ我は仲間が無くても最強ゆえ必要無いから楽だなっ！
そういえばハヤトやカノンは仲間にできたのか？」

「今はアレキサンダーさんと交渉中です。
あ、あとメテオさんとの修行でケルベを使ってみたんですが
意外と強かったです」

「そんなに強いのがいるなら私にも使わせてよ」

「今度バルガンナーを使わせますから落ちついてください」

「はっはっは！そんなに強いなら我と戦うか？
まあ、メテオに勝てんお前にはまだ我を倒せんかもだがww」

「・・・本当に楽しそうな夢・・・
けど何でなんだろう」

何でこの夢ではノヴァと笑い合っているのに
あの夢のノヴァは復讐の為にアポロとルナを殺したんだ・・・
それにこの夢に出てきた新たな言葉

——ブレイブ——

話しからして何かの力っばいけど・・・

途端に視界が白くなる。

ああ、目が覚めるのかと思いながら
俺は目を覚ました。

《どうしたの？主？難しい顔して》

学校に向かつてる最中に手首に巻いているルナが話しかけてくる

こいつは俺の夢の内容（子供の頃から見てる方）を知ってるようだし
新しい夢も知ってるだろう。

「何でも無いですよ。ただ高町さんにこのジュエルシード・・・でし
たっけ？

どう渡そうかな？って」

これは昨日の夜に黒い化け物を倒した後に手に入れたもの
ルナから色々聞いた話したとこのジュエルシードは危険なものらしく
あのフェレットが回収しているらしい

多分高町さんはいつものお人好しで協力してんだろうなあ・・・間

違いない・・・

《まあ、次のジュエルシードに出くわして、会ってから渡せばいいんじゃない？》

「それしか無いですよねえ・・・学校では手渡しできませんし・・・ジュエルシードはちょっとした事で暴走する可能性があるらしく手渡し程度で暴走しないとは思っけど念の為に渡せない。」

《それじゃあそろそろ人が出てきたし、私は待機状態になっていきますね》

「ええ、それでは」

そう返事し、通学路を見つめる

まあ、考えてても仕方ない
とりあえず気楽に行ってみましょう。

そう思いながら学校に向かった。

昼になり、またいつも通り高町さんに連れだされる。
しかし今日は少し様子が違った。

僕に対して拳動不審な態度をとるのだ

やっぱ今渡した方がいいのかな？

そんな様子をバニングスさんと月村さんは不思議そうに見ていた。

放課後になりみんなが教室を出て行く。

今日は高町さん達の通う塾はお休みなので一緒に帰るかと思いきや・

・

【《主？青春してる所悪いんですが・・・

ジュエルシードの気配があるので向かってください》】

ルナが念話で話しかけてくる。

・・・用事ができてしまった・・・

仕方ない。さつさと向かいましょう

みんなにはジジイに呼ばれたからと適当な理由を言い、
急いで教室を出た。

「で、ここが出現場所ですか？」

ルナの指示で今、神社の林の中にいた。

《そうですね、でも今回は一体だけなので大丈夫でしょうね》

「そうですか」

何が大丈夫なのかはわからないが

とりあえず高町さんが来る前に仕留めましょうか

そう思っていると・・

「きゃああああっ！」

鳥居の方から悲鳴が聞こえてきた。

しまった、と思いながら悲鳴のした所へと駆けつけると
狼のような姿をした化け物がいた

《主、相手は生物を取り込んでいます》

「生物を!？」

《ジュエルシードを取り除けば元に戻るけど

取り除くまでが厄介かも・・・》

だったら早く取り除いてあげないと

「なら行くよ！
ルナ！セットアップ」

《セットアップ》

すぐさま昨日と同じ赤いバリアジャケット、
太陽剣『アポロ』が握られる

そして化け物に切り掛かる。
しかし・・・

「なっ！？」

皮膚が硬く、剣がはじかれる。

くそっ！？早くケリつけたいってのに！

「陽太君っ！」

いきなり名前を呼ばれ、振り向く。
そこに教室で別れたはずの高町がいた。

「高町！？くそっ！さっさとケリつけて危険を遠ざけたかったのに」
《愚痴つても仕方ないですよ。あっちもセットアップ済ませたみたいですし》

高町の方をみるとバリアジャケットを着ている。
それを見たのが駄目だった。

「ぐはっ！」

よそ見している隙に化け物に吹き飛ばされる
そのまま落下地点に先回りされ、地面に叩き落とされた。
頭から落とされた所為か意識が朦朧とする。

「た、高町……」

その言葉を最後に僕は意識が途切れた。

第三話 変わり始めるもの（後書き）

陽太「ちよつと！？僕弱くないですか！？」

何ですか！？戦闘早々よそ見して地面にたたき落とされて気絶って！？」

作者「まあまあ、アニメのあの人も言ってたでしょ？」

スピリット一体の力が足りなくてもブレイヴがあれば三倍力だと」

陽太「だれも言ってますし！しかも僕はスピリットじゃないですし！

と言うか僕、ブレイヴするまで弱いままですか！？」

作者「大丈夫、強くするし、ブレイヴは次回に一体出すよ？

・・・ランダムで」

陽太「・・・もうやだ、この駄作者・・・」

作者「ぬおおお！！！！言っちゃ駄目な事言われたゝ（泣）

・・・で、では感想がありましたら遠慮なくください
それでは！」

第四話 陽太の憂鬱とルナの助言（前書き）

ネガ「いやあ、できたできた」

陽太「とりあえず何で遅れたの？」

ネガ「単にネタが無かったただけだが？」

陽太「よくこれ書いたね！？」

ネガ「でも内容がめつためたのめつたくそに焼いたから・・・」

陽太「そのネタはわからない人が多いから止めて」

ネガ「（・3・）ブー。まあ、頑張ったので読んでください
では第四話始まります」

第四話 陽太の憂鬱とルナの助言

「——うん？」

目が覚めると知らない部屋のベットで横になっていた。

あれ？確か僕は狼の化け物と戦って・・・

——よそ見して吹き飛ばされて地面に叩き落とされて気絶したんだっけ・・・orz

「って、あれ？ルナが無い・・・」

自己嫌悪していると首に掛けていたルナがない事と気付いた。

「困りました・・・ルナが無いとあの後どうなったかわかりません」

そう思いベットから抜け出す。
と同時に・・・

「あつ、気がついた？」

高町さんが部屋に入ってきた。
と、ゆう事は・・・

この部屋は高町さんの部屋だから・・・僕が寝ていたのは高町さんの・・・

——ベットっ!？

「あわわわっ！？お、女の子のべ、ベットに寝てたって、え、ええええ！？」

あまりにもびっくりして慌ててしまう

《まあまあ、主は落ちついてください》

聞きなれた声が聞こえ、ピタリと止まる
声のした方を見ると高町さんの手にルナが握られていた。

「あ、あのこれ・・・」

高町さんがおずおずと差し出してくる

「う、うん、ありがとう」

僕もぎこちなく受け取る。

あつ、そうだ！

「そついえば高町さん！大丈夫だった！？」

「ふ、ふえ！？大丈夫って何が？」

「何がって・・・あの狼みたいのと戦ってたんじゃない・・・」

「あゝ、あれなら・・・」

高町さんの話によるとあの狼のジュエルシードはちゃんと封印できたらしく、

倒れた僕を運ぶのが一番の苦勞だったらしい

——申し訳ない……

その後、ユーノ君（フェレットの名前らしい）とやらがルナと話を
していて、

どうゆう関係？と聞いてみたらユーノ君がルナをこの世界に連れて
来たらしく

それでその後は？とかの世間話をしていたらしい

「それでね？えっと、ジュエルシードの事なんだけど……」

高町さんが口ごもりながら言う。

ジュエルシード？ジュエルシードがどうしたんだろ？

《主？たぶんこの前というか昨日の事だと思っんですが……》

ああ、あの化け物の時のか

「うん、最初から高町さんにあげるつもりだったよ？はい」

ルナからジュエルシードを取り出し、高町さんに渡した。

「あ、ありがとう」

「お礼なんていいよ、僕には必要ない物だし」

「うっん、それでもありがとう」

高町さんが微笑みながら言った

「っ／／／」

それに対して僕は言葉を詰まらせていた
それと同時に顔が熱くなる

な、なんで！？なんで顔が熱いの僕！？

「どうかしたの？」

高町さんが心配そうに顔を近づけてくる

「なっ、なんでもないですっ／／／」

何を必死になっているのかわからないけど、これだけはわかる

“早く離れなきゃ”

「そ、それじゃあ高町しゃんっ、また学校でっ！」

「ええ！？ちよつと待って！？」

高町さんの言葉も聞かず、部屋を出て

そのまま僕は高町さんの家から飛び出していた

「ううゝ、まだ顔が熱いです・・・」

何で顔が熱いのか、家に着いて休んでいてもわからなかった

ほんとにどうしちゃったんでしょう、僕・・・

《主が照れてる》

「照れてませんっ!」

ルナが僕をからかうせいでさらに混乱する

《お礼言われて顔を赤くするのは照れてる証拠ですゝwww》

「・・・ルナ・・・僕は本当にお礼を言われる立場なんですよか？」

からかわれすぎて僕は頭がおかしくなったのか
ふと、そんな事を思ってしまった

「僕は君と初めて会った時の戦闘では高町さんを助けられました
けど今回は足引っ張って迷惑かけて・・・」

本当に自分が嫌になる。勝手に色々解釈して

勝手に手助けしてる気になって——でも結局は迷惑かけて・・・

《主？たぶんなのはさんはそんな事思ってますんよ？》

「え？」

《というか手助けしてるってわかる訳ないですよwwww》
は？

《だって昨日の今日で協力してくれるとか思う訳ないですし
足引っ張ってってそんな台詞は仲間に使うもんですよwwww》
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

《だから言いましょう？僕は君に協力したいんだって》

・・・・・・・・言葉が一瞬わからなくなった。
そういえば僕は高町さんとちゃんとこの話してなかった
自分の意思を言葉にしてなかった。

「そうだよね・・・・ごめん、ルナ。僕考え過ぎてたみたい」

《そうですよ、主はもっと素直にならないと》

「うん、ありがとう」

ちゃんと伝えてみるよ、とルナに誓い
僕は眠りについた。

――夢が始まった

また内容が違う。今度は広場らしい所にいる
目の前にはまたノヴァとルナと呼ばれる女の子

「ねえねえ、ノヴァの弟ってどれ？」

「おいおい、我の弟を物扱いしないでくれ。おっ、いたいた
あれが我が弟だ」

ノヴァが赤い髪の男の子を指さす。
男の子もこっちに気づくと満面の笑顔で走ってきた

「兄さまー！」

「ヴルム、良い子にしていたか？」

「うん！」

ヴルムと呼ばれた少年は俺とルナの方をみる

「兄さま、この人達は？」

「我の友だ。ほらヴルム、自己紹介を」

「え、っと、ヴルムです！9歳です！」

ヴルムが元気に自己紹介したのでこっちも自己紹介しないと・・

「初めまして、僕の名前はアポロです。よろしく」

「やつほゝ、私の名前はルナだよ。よろしくね」

「はい、よろしくです!」

元気に返事を返すヴルム君

「それにしても全然似てないねwww」

似てない事を指摘し笑うルナ

「よし、表出る。星にしてやる」

それを怒りながら笑顔で怖い事を言うノヴァ

今日の夢もほのぼのとした話だった。

笑って、遊んで、たまに喧嘩してと幸せそうな夢……
いつまでもこの光景が続けばいいのに

第四話 陽太の憂鬱とルナの助言（後書き）

陽太「あの・・・僕、夢見過ぎじゃない？」

ネガ「そうゆう設定なの、仕方ないの」

陽太「それに早とちりも・・・」

ネガ「あれは俺のミス、だから気にするな」

陽太「で、でも」

ネガ「次の回で言うんだから良いでしょう！？そしたら早とちりにならない！おk？」

陽太「は、はい・・・」

ネガ「よし、では感想や言いたい事があればどんどんください
次回ではあのブレイヴが参上！？みたいな展開だします！
ではごきげんよ」

陽太「ネタばらしていいのかな？」

ネガ「いいんだよ！どうせ俺のは意味ない！」（えー）

番外編 あの時あなたは・・・・・・・・（前書き）

陽太「あの・・・タイトルが妙に変な気が・・・」

ネガ「ギャルゲーもあんな感じでしょ？気にしない気にしない」

陽太「でもギャルゲーに興味ない読者もいるかもですし・・・」

ネガ「それでもいいさ・・・」

 どんなに世界（読者）が君（陽太）を嫌おうとも僕がずっと
守ろう」

陽太「ギャルゲーの台詞を僕に言わないでください。気持ち悪い」

ネガ「では思いつきで書いた番外編始まります！」

陽太「思いつきだったの!？」

番外編 あの時のあなたは・・・・・・・・

《ねえ、主》

高町さんに助けたいという気持ちを伝えたその日の夜、いきなりルナが話しかけてくる。

「なんですか？今勉強してるんですが・・・」

《気になってたんだけど、何で主はなのはちゃんを助けたいと思ったのかなあって》

「・・・・・・・・それを今聞きますか・・・」

「そんなに大層な理由は無いです。やましい気持ちも」

《なら何故？》

「ただ、高町さんは人の為、誰かの為に少し無茶をするんです。あの時だって・・・・・・・・」

《あの時？》

「少し話しましょうかね・・・・・・・・」

—— あれは確か一年生の頃・・・・・・・・」

この頃の僕はあまり人と係わらないようにしていました
理由は……夢のせいですね。こんな同じ夢をみる変な人と
友達に誰もなりたくないと思い込んでたんだ。
教室では一人で窓を眺めてるだけだった。

そんな毎日のある日、

「ん？」

金髪の女の子が紫の色をした女の子のカチューシャを取ってイタズ
ラしてる光景が目に入った。

金髪の子は同じクラスでいじめっ子として多少は知っていた。
紫の子も同じクラスだが、あまり目立たない子だったはずだ

この時、何を思ったのか、その様子を見に行った
着いた時にあの人はいた。

その人は金髪の子にビンタをした

そしてこう言い放った。

「痛い？でも大事な物を取られた人の心はもつと痛いんだよ」

あの人……高町さんの同じ小学生とは思えない言葉に一瞬思考
が止まった。

その後、高町さんと金髪の子……バニングスさんが喧嘩し始め
ちよつと困惑してしまった

でもわかったのは高町さんは月村さんを助けるためにバニングスさ
んを止めた。

この時はお人好しだと思った。でも同時にすごく心の強い人だと思

った

なんせいじめっ子にビンタして説教するなんて僕には考えられない。

この事以降、高町さんとバニングスさんと月村さんが仲良くしているのを見かけるようになった。

「あの時はホントにこの人小学生って思いました。
しかも喧嘩してたみたいですから無茶するなあって」

《主は助けようとしなかったの？》

「無理ですね。人と係わるのを避けてたんですから
当然助けるのも無理です。」

《でもいつ主はそんな風になったの？》

「……それも言わないと駄目ですか？
この話はあまりしたくないのですが……」

「つい最近ですよ。大体2週間くらい前のはず……」

三年生にもなると周りの様子と空の景色にも飽きてくる。

あの子とあの子が仲が良く、あの子とあの子が仲が悪いと言つ事は全部覚えてしまつてゐる。

でもそんな事覚えても無駄な事……人と係わらないんだから……

でもまたそんなある日の昼休み

「君、暇？」

とある女子に話しかけられた。

声の主は高町なのはだった。

でもこの時は本気で誰とも係わりたくなかつたから

「いやです」

と、きつぱり断つた。

嫌いとかそう言うのではなく、思い込みのせいで断つていたでも……

「ひとりで食べてもおいしくないよ？」

しつこく高町さんは話しかけてくる。

何で構うの？僕は気持ち悪いんだよ？

そう思つても彼女には伝わらない。

とりあえず無視することにする。

高町さんもこれで諦めてくれるでしょう。と、思っていると

「あ、アリサちゃん、すずかちゃん、ここで食べよう!」

ともだち
援軍を呼ばれました。

ホントに何なの!?この人!?

「別にいいわよ?」

向こうも返事をして

近くの席に座り始める。

近くに人が居る。

その雰囲気から逃げ出そうとした時

「逃げちゃだめなの!」

襟を掴まれた。

「放して・・・」

短く、そして怖がつてる感じで拒絶する。
だけど・・・

「だめなの!」

僕の拒絶は一掃されてしまった
どうやら拒否権はないらしい

仕方ないので今日の所は無視をしてお昼を食べた。
途中、色々言われた気がするが全部無視した。

今日だけだろうと信じて・・・

だけど翌日の昼休みも高町さんは誘って来た。

僕はまた拒否するが高町さんもまた友達を呼び、逃げようとする僕を高町さんが襟を掴んで放さない

そんな日が毎回続いた。

休み明け月曜日の昼休み

僕は聞きたくなかった事を聞いてみた。

「高町さんは何で僕に係わろうとするの？」

「え？」

高町さんは何でそんな事聞くの？みたいな顔で見つめてきた。

「だって、一人でいるって寂しいよ？」

さも同然のように放った言葉に僕はあの時みたいに言葉を失った。

何でこの子は簡単にこんな言葉を言えるのだろう。

あの時だって小学生らしくない事を言っていた。

この子なら・・・高町さんなら・・・高町さん達なら僕のことを・・・

「あの……高町さん……
僕……」

僕の思い込みの事、その理由を彼女達に話した……

《それどうなったの？主？》

「次の日も変わらず、お弁当と一緒に食べましたよ？
あと友達だよって言ってもらいましたし……」

名前忘れられたけど……（泣）

《でも主はいつも嫌そうだね？何で？》

え……だ、だって……

「恥ずかしいじゃないですか／＼女の子と一緒にお昼なんて／＼
でも断ると悪いですし……」

《……》

ルナは僕の返答を聞くと黙り出した……
僕変な事言った？

《主は思い込みが激しくて、恥ずかしがり屋で、
ツンデレということがわかりました》

何で！？確かに最初の二つは当たってますけど
最後は違くないですか！？

「ツンデレと聞こえてジジイ参上！」

ドンとドアを破ってジジイが入ってくる。

「入らないください、出てってください、消えてください、あと
ツンデレじゃないです」

「まあまあ。そう言わんでわしとギャルゲーでも……」

「……ディスク折るよ？」

「お休みなさい」

光の速さでジジイが居なくなる。

ふう、疲れました。

ルナの言葉にもジジイにも……

《まあ……主にそういう事があったのはわかったけど……》

けど？

《何である時の台詞に繋がるの？》

あの時の台詞？僕何か言いましたっけ？

《『あの人、あいつは僕を救ってくれたんだ！

あいつは知らないかもだけど救ってくれたんだ！』》

うわあああああつ！！言わないで！

何で僕の声真似できるのか聞かないから言わないで（泣）

《教えないともう一度》

「わかった！わかったから言わないでください！

・・・僕の思い込みを否定してくれたからですよ・・・

『それは君の思い込みだよ、なら私と友達になろう？』って

《何でそれで救われるの？》

質問ばつかですね・・・

「僕が思い込みから解放された後、周りを見たんです。

そしたら世界がガラリと変わった・・・

友達が高町さん達ただけど・・・それでもうれしかったんです」

《それではちゃんに救われたと・・・》

「はい。ホントにあの時の高町さんはまるで・・・太陽みたいでした／＼」

また顔が熱くなる。何ででしょう？

高町さんの事を考えると・・・

《・・・主は高町さんが好きなんですネ♪ニヤニヤっ》

「えっ！？ちよっ！ち、違います！好きじゃないです！

い、いや別に嫌いじゃないですが、って僕は何言ってるんですか！」

ルナの突然の発言に頭が混乱してきた。

《主はツンデレだよね〜www》

「ツンデレと聞いてジジイまた参上！」

「ツンデレじゃないです〜！！！！！」

こんな感じで夜も更けていった。

明日からは高町さんの手助け1日目・・・・・・・・
しよっぱなから挫折そう・・・

番外編 あの時あなたは・・・・・・・・（後書き）

ネガ「ツンデレ」（笑）

陽太「言うなああ!!」

ネガ「『あいつは僕を救ってくれたんだ!』」

陽太「それも止めてください!」

ネガ「俺もさすがにきつかった・・・・ごめん」

陽太「ならもうあんな台詞は止めてください」

ネガ「うん、それ無理」（朝○さん風）

陽太「拒否された!？」

ネガ「では、次はマジで5話を書いて出すのでこつこつ期待!・・・してないか」

陽太「しかも弱気!」

ネガ「では皆さん!また次回!アデユ」

第5話 大樹貫け！新たな力『ブレイヴ』！（前書き）

陽太「タイトルがまた変な感じに・・・」

ネガ「だって・・・アニメのタイトルみたいにしたらかったんだもん（・3・）」

陽太「も〜んって子供ですかあなたは・・・」

ネガ「俺はいつでも夢を忘れない子供さ！」（キラッ）

陽太「ふざけた事言っでないで始めてください」

ネガ「そっちから振って来たんじゃないん・・・」

では第5話始まります！」

第5話 大樹貫け！新たな力『ブレイヴ』！

高町さんに手伝いたいという気持ちを伝えた次の日

ん？結果はどうだったかって？もちろんOK貰いました。
うれしいよと言われ、手を握られましたけど・・・／／
べ、別に照れてる訳じゃないですが・・・

《ツンデレ》

「だから違います！」

ルナは昨日の夜からこんな感じでからかってきます。
何でこんな事を言われるんでしょう？

《そんな事より主、そろそろ》

「ん？・・・ああ、そうですね」

今日は日曜日で、高町さん達からサッカーの試合を見に行くから来
ない？

と誘われました。

なんでも高町さんのお父さんが監督をしているらしい

「それではそろそろ向かいましょうか」

《それじゃあ、レッツゴー！》

「あつ、陽太君っ」

声をかけられ振り返る。

声の主は月村すずかさんだった

その後ろには高町さんとバニングスさんもいた
ユーノ君も当然の如く高町さんの肩に乗っている。

「遅いわよ、いったい何してたの！」

「普通に準備して来たんですが・・・」

あいかわらず怖いです。

何でこんなに怖いんでしょう？

「あ、アリサちゃん、そんなに怒らなくても・・・」

「怒ってないわよ」

月村さんが宥めているがやっぱり怖い。

僕怒らせるような事しましたっけ？

そう思っていると手を掴まれた。

誰かと思い見て見ると高町さんが僕の手を掴んでいた

「ほらっ、早く行こう」

「うわっ、ちょ、待って」

手を引かれ、ベンチの方まで引つ張られた

ベンチには高町さん、僕、バニングスさん、月村さんの順に座る事になった

当然、席から外れようとしたら高町さんに服の裾を掴まれ

「だめなの」

——と僕の抵抗は一掃されてしまったorz

試合が終わり、只今帰路に帰っている。

試合は2 - 0で高町さんのお父さんの監督するチームが勝った。

高町さん達は翠屋にケーキを食べに行つた

僕も誘われたが用事があり、断った。

用事は街を回ってジュエルシードの探索だ

・・・高町さん達とケーキを食べたかったorz

《主がやるって言っただんじゃん》

そうなんだけど・・・

高町さんも

「無理しないで？」

って言ってたし・・・そろそろ帰ろっかな？

《主に無茶する人と言うスキルが追加しそうで怖いよ》

「ちょっと待て、いつ僕にスキルがあっただんですか」

《昨日のツン・・・》

「今すぐ帰ろう。そしてルナに僕をどう考えてるか聞き出して改変する」

そうと決めて帰路に入った

・・・はずだった。

いきなり街の向こうから青白い光が射し、その後街の地面から木が生えだした。

「ルナ！これは！？」

《ジュエルシードだね・・・とりあえず光の中心に向かってみよう》

「わかった」

ルナの指示で光の射した方に向かった。

光の中心に行くとそこには一面に木が広がっていた。

《どうやらジュエルシードが何かに反応したんだろうね》

「なら燃やすまでです。セツトアップ!」

セツトアップし、大剣を木の根に向かって構える

「木には火を!『フレイムテンペスト』!」

大剣を振り、炎を放つ

炎は木に直撃し、燃え盛る……が

「えっ!?火が消えていく!?!」

木に広がって行く火が突然消えた。

そして燃えた所もたちまち再生していた

《まさか再生能力があるなんて……》

「関係ないっ!ぶった切る!」

そう言い、大剣を構え、切りつける。

しかし、切り口が再生し元に戻ってしまう。

「っ!っっ!っっ!」

それでも何度も何度も切りつける。
……でもやはり再生してしまう

くそっ！何かないのか！

《とりあえずジュエルシードのある所を探して封印するしかないけど》

「はあはあ……ルナは封印ができないんだよね？」

《うん、そういう風に造られてないから……》

なら、高町を探して一緒に探すか。

高町の事だからもうこの近くにいるはずだ。

「高町の居場所はわかるか？」

《うん、すぐ近くのビルの屋上にいるよ》

「よし、なら……」

翼をはためかせ、飛び

そのまま高町を探し始める。

ビルの屋上で魔法陣を展開させている高町を見つけ、そこに足を下ろす。

「あ、陽太さん」

ユーノが俺に気づく

「呼び捨てで良い。それより高町は何してんだ」

「今、木の元となってる場所を探してる」

そうか、やっぱり高町はすごいや・・・
目が真剣だもん。

「見つけた！」

「ホント！？」

どうやら見つかった様だ。
ホントにすごいな

「すぐ封印するから」

「ここからじゃ無理だよ。もっと近くに行かなきゃ」

「できるよ。大丈夫っ

・・・そうだよな、レイジング・ハート」

《シューティングモード、セットアップ》

高町の言葉に答えるかのようにレイジング・ハートが形を変える。

・・・かっこいい・・・
そんな言葉しか出なかった。

そして高町がレイジング・ハートを構え、

「行つて！捕まえて！」

桃色の砲撃を放った。

・・・しかし

「えっ、そんな・・・」

木の枝が何かを守るように動き出し、高町の砲撃が遮られた。
くそっ、何でも有りだなこの木は！

「高町！」

「ふえっ！？陽太君！？」

驚きながら高町がこっちを向く。
気づいてなかったのか・・・orz
ってそんな事してる暇ない

「俺が飛んであの枝を切り落とす。その間にさっきのをもう一回やれ！」

「そんな、危ないよ！」

「大丈夫だ！俺を信じろ！」

「でも！」

俺が何を言っても高町は引かない。
ちっ、頑固も一級品だな

《なのはちゃん》

「え、ルナちゃん？」

ルナが止めに入ってきた。

つか、お前らいつの間になちゃん付けで呼び合う仲になったんだ？

《なのはちゃんは主の心配してくれてるんだよね？》

「う、うん」

《で、主は手助けしたいんだよね？》

「おう」

その後、沈黙が流れる。
そして・・・

《主、今から私と誓ってください。

どんな時でもできる限りなのはちゃんを助けて、主も無茶をしないと》

何を言ってるんだ。誓い？
今そんなの関係ないだろ！

《主っ！》

「むっ……ち、誓う……」

ルナに圧され答えてしまった。
もし破ったらどうするんだよ……

《大丈夫、主は約束を守る人と信じてるから》

……買被りすぎだこいつは……

「……で、どうするんだよ」

《主、今から真の力を解放するよ。
その名も『ブレイヴ』……》

っ！？ブレイヴ！？

夢に少しだけ出てきた言葉だ。

「ブレイヴ？」

高町とユーノは何の事かわからず首を傾げている。

「ルナ！俺はどうすればいい」

《まずは落ちついて、

……ブレイヴモード……ver赤……
ブレイヴ『バル・ガンナー』！》

ルナが叫ぶと同時に光出す。

光が晴れるとそこには二つの大砲を背負い、四本の足で立つ……

トカゲ？

《竜だよ！竜！》

「いや、どう見てもトカゲ《竜なの！》・・・わかったよ」

こんな時にトカ・・・もとい竜に怒鳴られる俺って・・・

《まあ、気を取り直して・・・主、私と合体して》
ブレイヴ

「・・・どうすれば・・・」

いきなりブレイヴしろと言われても知らないし・・・

《とりあえず後ろ向いて力を抜いて》

「おお・・・」

言われた通りに後ろを向き力を抜く。
すると背中に違和感が・・・

首だけで振り向こうとし、背中をみると・・・

「ぬおおおお！？何か融合してる！？」

言葉通り、背中に竜が溶け込んでいた
これがブレイヴ！？想像してたのと違う！

《仕方ないよ。お互い合体する意識がないとこうなっちゃうんだから》
ブレイヴ

だからってこれは気持ち悪いだろ！

ほら見ろっ！高町なんて顔が真っ青だぞ！

《もう少しで・・・終わるから・・・良し完了！

もう良いよ、主》

そう言われ、再び背中を見ると翼は消えてあの竜の背中部分がくっついていた。

確かに力が湧いてくるのがわかるが・・・

これでどうしろと？

《主がジュエルシードの埋まってる木に砲撃を放って、その後すぐになのはちゃんが打ち込めばいけるはず！》

「・・・了解だ！いくぞ高町！」

「うん」

ルナの作戦に賛同し、高町に呼びかける高町も賛同し、まず俺が放つ準備をする。

《主、なのはちゃんが撃った方向に全力で撃って！》

「了解！」

そのまま四つん這いになり、砲口を高町が撃った方へ向ける。

イメージは貫く感じで・・・撃つ！

「行くぞ！高町！」

「うん！」

「『バル・バスター』 あああ！」

砲口から赤い砲撃を放った。

そして伸びてきた木の枝を貫き、消滅させる

「今だっ！」

「うん！もう一回行って！捕まえて！」

次にもう一度高町が砲撃を放つ。

砲撃は枝の妨害を受けず、今度はちゃんと狙いと思われる所に直撃した。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル？
……封印っ」

さらにレイジング・ハートから砲撃が放たれる。

砲撃はとある木に当たると光出し、他の木々を包みこんだ。

「終わった……疲れた……」

そう言いながらベットに倒れこむ。

あの後、木々は消滅してジュエルシードも回収した。
でも、帰り際に高町さんの悲しそうな顔を思い出す。

「あんな顔させるなんて僕もまだまだかなあ……」

《ん？なんか言った？主？》

「何でもないですよ」

しょんぼりしてても仕方ない。
次に高町さんが笑顔になるように頑張れば良いだけです。

「陽太side end」

「????side」

月明かりの夜、ビルの屋上に一人、少年が立っていた。

「ここにブレイヴの気配があったのか？」

《そうです。主様》

少年の声に答えるのは一つのブレスレット

「そうか．．．なら会う時が楽しみだ．．．」

少年は笑いながらその場を後にした．．．

「??? side end」

第5話 大樹貫け！新たな力『ブレイヴ』！（後書き）

ネガ「ヤヴァい・・・ヤヴァいよぉ・・・」

陽太「どうしたんですか？かなりやつれてるみたいですが？」

ネガ「文に自信がなくなってきた・・・」

陽太「自信になるほどうまくないじゃないですか」

ネガ「はつきり言うねえ・・・うまくないかもしれないけど
凹んでんの・・・表現とかあまりわからないからシユシユツ
と書いてるし」

陽太「なら読んでる人に指摘貰えばいいじゃないですか」

ネガ「そ・れ・だ！！！」

陽太「こいつ真正のあほだ・・・」

ネガ「今回の文に指摘がありましたらどんどんください。

ここの表現をこうして欲しいとかこうした方が良いとか何で
もいいです」

陽太「片っぱしだな、この人・・・」

ネガ「では、ごきげんよう！」

陽太「うちのバカ（ネガ）が失礼しました・・・」

第6話 新たなブレイヴと敗北（前書き）

ネガ「このタイトルは気にするべからず」

陽太「本編もホントに酷い・・・見てる人いるんですか？」

ネガ「いるよ！いてくれるよ！そんな酷い事言わないで！」

陽太「本当の事ですし・・・見捨てられるのも時間の問題ですね」

ネガ「くっ、こんな事で挫けちゃいけない・・・それでも俺は書き続ける！」

???《その意気です、作者様》

ネガ&陽太「誰!？」

???《それは本編で、では6話が始まります》

ネガ「（セリフ取られた・・・）」

第6話 新たなブレイヴと敗北

「暇です……」

とある日曜日の昼下がり……

――僕は暇を持て余していた

《主、だからってベットでゴロゴロするのはどうかなあ？》

「……仕方ないです。ジュエルシードの探索もしましたし……」

最近は休日にジュエルシードを探すのが日課になってきて
ゴロゴロするのも日課になってきた

そんな時側に置いてあった携帯が鳴る。

《主、鳴ってるよ》

「わかってます」

携帯を開くとメールが届いていた。

いったい誰から……バニングスさんからでした……
何々？えーっと……

『あんだ、今暇？』

暇ならすずかの家に来なさい。

なのはも来てるわよ』

・・・という内容だった。

何故高町さんの名前を出すんでしょう？

『拒否権は？』

とりあえず返信する。

送ってすぐに返事が来た

『無い』

その二文字だけで了承し、出かける準備をする。
すると、

「おおっ、何じゃ。どっかに出かけるのか？」

ジジイが部屋に入ってくる。

入ってきていいですけどノックぐらいして欲しい……

「うん、バニングさんに誘われて月村さんの家に……」

「なっ!？」

ジジイが驚愕する。

同時にジジイの後ろからドス黒いオーラが……

僕、何かした？

「……陽坊……お前をリア充の階段を上らせるかーっ!……!」

そう言いながらジジイがドアの前で仁王立ちする
って、えええっ!?

「ちょ、ちよっと！僕のどこが現実に充実してるのさ！」

「女の子の家に行くだけでも十分充実してるじゃろうがあああっ！
！！」

どという理屈だ！ジジイ！

「ここを通りたくば！これに勝ってみせい！」

ジジイが何かを突き付ける。

そ、それは!?

「デユ。ルマ。ターズ!？」

「そうじゃ！通りたかったらこのデッキに勝ってみせい！」

こうして僕とジジイのバトルが……………

……………5分で終わった。

今、僕は月村さんの家に向かっていた。
結果は速攻デッキを使った僕の勝ち

「というか僕、月村さんの家わからなかった」

《なら何で家を出たの…》

良いじゃないですか。暇だったんですから
わからなくても街をふらついてジュエルシードの探索に切り替えら
れるし

《そうやって切り替えられるのがすごいよ………——っ!?!?》

ルナが何かに気づく。

「どうしました?」

《主っ!この辺りにジュエルシードの気配がするよ!》

「本当!?!場所はわかる!?!」

《任せて!——って、あれ?何で?》

今度はどうした?

《主、大変!ジャミングが掛けられてる!》

ジャミング?ゲームという妨害電波のようなものでしょうか?
でも大変なのはわかった。

「とりあえずここを離れましょう」

そう提案し、前に進もうとした瞬間……

—— 何かが僕の頬をかすった。

「っ!？」

何かが来た方向を振り向くとそこには

足の部分にはレーザー砲らしきものを生やし、こちらに向けている
赤い鳥のようなものがいた。

《なっ、あれは…》

ルナが何故か驚いてる。

とりあえず僕は赤い鳥に話しかける。

「何者ですか!」

そう言つと…

《初めまして、私はアストラル。

主様の命によりあなたを試しに来ました》

試す? 何を試すんだ?

いや、それよりも……

「その主様とは誰なんだ!」

《主様は主様です。それでは

—— 覚悟してもらいます。》

赤い鳥——アストラルがレーザー砲らしきものを向ける。

「ルナ！セツトアップ！」

放たれた瞬間にセツトアップし、飛んでかわす。

くっ、こいつとは話を通じない。
ならさっさと倒すのみだ！

「『フレイムテンペスト』！」

炎を振りまき攻撃するが、相手は華麗に飛び
すべての炎をかわした

「ちっ、何なんだ！あいつは」

さらに炎を振り散らすが全く攻撃が当たらない。

《主、多分あれは私と同じタイプのデバイスだと思う！》

「なら今のあいつはブレイヴモードなのか……でも何で一人で行動
を……」

そこに疑問を持つ。相手がデバイスならその主はどこにいる？

ブレイヴモードはブレイヴという生命体に変身して合体と単独行動
ができる。

アストラルの主はどこかに潜伏してるのか？

《どうしました？背中がお留守ですよ？》

いきなり後ろから声をかけられ慌てて後ろを振り向く。
目の前に発射をスタンバっているアストラルがいた。

「くっ！」

すぐに回避しようとするが間に合わない。

レーザー砲は俺の右肩と左足に当たる。

非殺傷に設定してるのかそんなに酷い怪我ではなかった。
しかし攻撃をもろに喰らってしまったからダメージは大きい

《あなたの力はその程度ですか？

そんな事では私の主様と戦っても負けますわ》

アストラルは余裕の表情だ。目の部分がニヤア〜となってるからそうだろう。

でもそんなの知るか。

苦しみながらも立ち上がり、大剣を構える

《そんなふらふらでは私に勝てません》

そんなのわかってる！でも…

「諦めたらそこでおしまいなんだよっ！」

そうアストラルに言い放った。

言い放った後、数分だけ沈黙が流れた。
そして…

《その覚悟は認めます。でもそれだけでは誰にも勝てません。

——主様には期待外れと報告します。それでは》

そう言い放ち、飛んで行ってしまった。

助かったはずなのに何故か悔しさだけが胸に残った。

「はあ」

自分の部屋に戻ってからため息ばかりついていた。

理由はあのアストラルと名乗ったデバイスに負けた事

多分、かなり戦いなれた人のデバイスなのだろう……

《主、凹んでる暇はないよ。問題は山積みなんだから》

ルナが急かす。それでも励ましてると信じたい。

あの後、夕方あたりに高町さんの家に行き、今日遭った事を話した。

そしたら高町さんももう一人の魔法使いに会ったと言った。

そこで戦闘になったそうだが結果は敗北。僕と同じだ

ジュエルシードも奪われてしまったとのこと。

もう一人の魔法使いも気になるが

僕が今、気になっているのはアストラルが言っていた

——主様…

あのデバイスは私と同じタイプだとルナが言っていた。
ということは向こうも僕と同じ力を持っているのか？

「……考え過ぎかもね」

そう言いながら窓の外を見る。

夜に輝く月が何故か強く光ってるように見えた。

「陽太side end」

「????side」

——とあるマンションの一部屋……

そのキッチンで一人の少年が何かを作りながら自分のブレスレットに話しかけていた。

「どうだった？ブレイヴ使いの少年は？」

《期待外れでした。あの程度では主様に負けはありません》

少年の問いにブレスレット——アストラルは即答する。

「そうか……しかし楽しみだ。自分と同じ力を持つ者に会えるのが……」

少年は微笑みながら鍋をかき混ぜる。

「月光？」

名前を呼ばれ、月光と呼ばれた少年は振り向く。

そこにはキッチンを覗く一人の金髪でツインテールの女の子がいた。

「ああ、すまない。もうすぐできるから待っていてくれ」

「うん」

そう返事し、女の子はキッチンからいなくなる。

「まずは食事をとらないとな」

そう言いながら、少年もキッチンを後にした……

「???? side end」

第6話 新たなブレイヴと敗北（後書き）

陽太「ホントに酷い文ですね……」

ネガ「言わないでくれ。消えなくなる……」

陽太「新キャラ出したのにこのクオリティは酷い」

ネガ「そこ新キャラ関係ない……（泣）」

陽太「こんな酷い文ですが見てくれている方、ありがとうございます」

ネガ「ラルが出たけどキャラこんな感じで良かったかな？

感想や指摘があれば容赦なくください。努力します」

陽太「ではまた次回で。」

第7話 強制参加！？温泉での不思議な出会い（前書き）

ネガ「待たせたなあ！第7話が始まるぜい！」

陽太「誰も待つてないと思いますが？」

ネガ「それを言うなよセニョリータ…」

「今回も新キャラが出てくるんだから」

陽太「なんですか？どうせあのデバ——」

ネガ「これ以上言うんじゃねえっ！

こいつが何か言う前に始めるぞ。

では7話、始まります」

第7話 強制参加！？温泉での不思議な出会い

ここ最近大変な事があった。

魔法使いになったり、夢が変化してたり

高町さんとジュエルシードを集めたり、

新たなブレイヴに攻撃されたり……

——そして連休の最初の日の今日も大変な事が起きていた

何かバツクのようなものに閉じ込められている。

耳を澄ますとエンジンの音も聞こえる

しかし体のどこにも縄で縛られてる訳でも口が縛られてる訳でもないから

誘拐ではなさそうです。

そんな時、

「あれ？あれは……」

首を動かすと近くに青い光が点滅しているのが見えた。

多分ルナだろうと思い、話しかける。

「ルナ？」

《……………》

返事が無い。ただの光るビー玉のようだ。

《んな訳あるかーっ!!》

「うわっ！びっくりした！」

いきなり喋り出し、びっくりする。
でもそんな事を気にしてる暇はない

「ルナ、ここはどこですか？いや、エンジンの音がするから車の中
なのはわかるんですが…

と言いかちよつと苦しいのですが…」

《よく言うよ。良く眠ってたくせに…

苦しいなら暴れれば出してもらえるよ》

出してもらえる？

言葉の意味はわからなかったがとりあえず体を動かしてみる。
すると……

「あつ、起きたみたい」

聞き覚えのある女の子の声がした。

…まさか……

——予感的中——

聞こえた声の主は高町さんだった…

他にもバニングスさん、月村さん。

高町さんのお父さんとお母さんが車に乗っていた。

そして今、自分の中にある疑問を高町さんのお父さんに聞いてみた。

「あの……何故僕はここにいるんでしょうか？」

「あれ？おじいさんから聞いてないかい？」

ジジイ？ジジイがどうしたんでしょう？

「孫を旅行に参加させて欲しいと頼まれてね。

聞けばなのはと友達のようにだし、良いかなと思ってね」

また勝手な事を……

「なら何で僕はバックに入れられて…」

「えっと、君のおじいさんが起きないからバックに詰めて連れて行くと言ってね

もちろん、やりすぎでは？と言ったんだがこのままで良いと言われてね…」

「……ジジイはどこですか？」

自分でも驚くほど低い声で聞いた。

多分今の僕は怖い顔をしてるだろう。高町さん達が青ざめてる。

「おじいさんなら家でゆっくりしてるって言っていたよ。」

……帰ったら覚えてろよジジイ……

ホントに怖い顔をしていたのか、高町さん達がカタカタ震えていた。

旅館に着き、部屋に荷物を置くと高町さん達と他の女性陣と男性陣は風呂へ向かって行った。

僕は部屋の中心で横になる。

「はあ……あんな事言われてもなあ……」

高町さんが部屋を出る際に

『今日はゆっくりしてね?』

とか言われてしまった。

ゆっくりするのはあなたでしょうか……

「なんでジジイは僕に内緒で高町さん達の旅行に参加させたんでしよう?」

ルナに聞いてみる。

《主って協力するようになってからジュエルシードの探索で外に行ってるじゃない？

その帰りでいつも主は疲れ切った顔してるんだよ？》

そんな顔してたのか…

まったく気付かなかった…

《多分ね…おじいちゃんも主の事が心配で

この旅行に参加させたんじゃないかな？》

あのジジイが心配ね…

部屋に来る回数が増えてきた事を考えると納得できるかも…
… ちょっとは感謝してもいいかな…

《主をバックに詰め込んで笑ってなければ良いおじいちゃんだったのに…》

「やっぱりあのジジイはブツ飛ばす」

前言撤回。

あのジジイに感謝する気持ちなど微塵もない。

帰ったらジジイをどう懲らしめようかと考えていると
高町さんのお父さん—— 士朗さんが入ってきた。

「ちょっといいかな？」

「え？あ、はい。どうぞ」

何かと思い、士朗さんを部屋の奥に招き入れる。
お互い座ると士朗さんは苦笑いしながら

「なのはの友達にこんな事をお願いするのもおかしいんだけど……」

お願い？

何をお願いするんでしょう……

「なのはを名前で呼んでくれないかい？
もちろんアリサちゃん達も」

「えっ？」

「よくなのはが今日も名前で呼んでもらえなかったと言っていてね。
だからちよつとお願いをね」

「それはわかりましたけど……何で高ま——なのはさんはそんな風にそう思ったんでしょう？」

名前を呼んでほしいというお願いはわかったけど
なんでなのはさんが名前を呼んでほしいのかわからない

「多分友達だからだよ」

「えっ？」

「友達だから名前を呼んでほしい……それは当り前の事だと思うよ」

友達だから……

ずっと前の僕にはわからなかった感覚。

でも今なら——わかるかもしれない。

「——はい、わかりました。次からはなのはさん達を名前で呼びます」

「ああ、ありがとう。じゃあ僕は行くよ。

……本当にありがとう」

小声で言つと士朗さんは部屋を出て行つた。

さてこの後はどうしようかな？

悩みに悩んだ末、風呂に入る事にした。

「ふう〜良い湯です……」

《じじくさいよ？主》

「うるさいよ。後、今はお客さんがいないからいいけど来たら黙ってくださいね？」

《わかってるよ、主……って言ってるそばから来た……んじゃ私は黙ってるからごゆっくり》

そう言つとルナは黙り込んだ。

その後ゆっくり浸かっていると僕より年上そうな人が入ってきた。

髪は銀色で後ろで縛っている。

瞳の色は金色で、整った顔立ち。

一目見ただけでかつこいいの一言しか出てこなかった。

「隣、いいか？」

「あ、ひゃいつ」

話しかけられると思わなかったのでちょっと変に答えてしまった。

「ふうゝ……」

風呂に入ると気持ち良さそうに息を吐く。

そして

「おまえ……旅行できてるのか？」

「えっ？」

話しかけられた。

し、知らない人に声かけられた…

こんな時どうしたらっ！

「いきなりですまない。俺の名前は夜神月光^{やがみげっこう}。

ここには旅行…のようなもので来ている」

じ、自己紹介されたっ！

僕もした方がいいよね？

「ぼ、僕は望月陽太もちづき ようたです。

僕もここに旅行で来てます。……ほぼ強制ですが……」

「そうか……」

そこで会話が終わってしまった。
ど、どうしよう……気まずい……

「ん？」

そこで僕はあるものに気づいた。
月光さんが腕に綺麗な銀色のブレスレットをつけている。

「あの、そのブレスレットって……」

「ああ、これか？

……これはとても大切なものだ……とてもな……」

そう言う月光さんはとても悲しそうな顔をしていた。

「さて、そろそろ出るとしよう」

「えっ、もう出るんですか？」

「ああ。連れもいるし長くは入れんしな……」

そして月光さんが扉に手をかけ、

「それにこれは下見だ…」

いきなり頭に声が響いた。

えっ？今のつて

「——念話？」

気になり、月光さんを追いかけると
月光さんは居なくなっていた。

第7話 強制参加！？温泉での不思議な出会い（後書き）

陽太「なあ…大丈夫か？これ」

ネガ「これって何が？」

陽太「いや、表現やら説明やら……めちゃくちゃじゃない？」

ネガ「うん……俺も月光くんの容姿の説明はこれでいいのか、月光くんの喋り方はこれでいいのか悩んでいる」

陽太「資料は？」

ネガ「追加をお願いしたが忙しいのか間に合わなかった。」

陽太「なら仕方ないですね…」

ネガ「では今回の文に誤字・脱字や感想、気になった事があれば容赦微塵も無くください」

陽太「では失礼。」

第8話 白銀の魔法使い…その名は「月光（げっこう）」（前書き）

ネガ「これを見る君たちに注意事項だ！

今回の話はあまり自信ない！」

陽太「そんな自信もって言う事じゃないような…」

ネガ「気にするな。では第8話始まります」

第8話 白銀の魔法使い…その名は「月光（げつこう）」

「月光 side」

俺はブレイヴを使う少年に宣戦布告した後、旅館の廊下を歩いていた。

「《主様、やはり戦うのですか？》」

俺のデバイス——アストラルが話しかけてきた

「「ああ、これは俺が望んだ事……」

いや、俺の中の”何か”が望んでいる事だからだ」」

あの少年——望月陽太に会った時、何かを感じた。
そして体の奥底の”何か”がその何かを求めた。

「《…主様が望むのなら私はただ共に闘うだけです》」

「すまない……」

声を出してラルに謝罪し、前を見る。

向こうには俺の連れがコーヒー牛乳を飲んでくつろいでいた。

「アルフ……耳が出てるぞ。気をつける」

連れに近づき、俺は注意して共にくつろぐ事にした。

——この後に来るだろう戦いに備えて。

「月光side end」

「陽太side」

お風呂場で不思議な人に出会った後、僕は部屋に戻ってきたんですが……
なのはさん達が真剣な顔でにらみ合っている。
そして……

「じゃんけん！…ポンっ！」

そしていきなりじゃんけんを始めていた。

「えっと……何をしてるんですか？」

「何ってどの場所に寝るか決めてるのよ！」

聞いたただけなのにアリサさんに怒鳴られた！？

部屋を見ると布団がすでに敷かれている。

多分、ご飯を食べて旅館内を見たらすぐに寝るという感じになって
いるのだろう

そしてなのはさん達が決めているのは寝る順…誰がどこで寝るかを
決めてるんでしょう。

「じゃあ僕も参加した方が…」

「『陽太（君）は駄目！』」

参加しようとしたら拒否された！

「陽太君の寝る所はそこなの！」

なのはさんが指さした方を見ると
右端から2番目の布団をさしていた。

「…僕はそこで寝るの？」

「」「うん」「」

「拒否権は？」

「」「無いよ？」「」

……僕はこの時思った……
絶対眠れないと

そして夜。

寝る順は

右からずさかさん↓僕↓アリサさん↓なのはさんの順になった。
決まった後、なのははご飯を食べるまでずっと「うーうー」悔しそ
うに唸っていた。

何が悔しいんでしょう？

とりあえず寝る前に士朗さんとの約束を果たすためののはさんとアリサさん、すずかさんを名前で呼んでみる事にした。

「あの・・・な、なの／＼／」

名前を呼ぼうとするだけなのに顔が赤くなる。

どうして！？心の中でははっきり言えるのに！？

「どうしたの？陽太君？」

すずかさんが心配そうに近づいてくる。

よし！ならまずすずかさんの名前を……

「えっと、す、すすすす…／＼／」

「大丈夫！？顔が真っ赤だよ？」

駄目だ！言えないorz

「どうしたのよ？」

今度はアリサさんが来た。

うん、次こそ言えるはず！

「あ、あり、ありあり…／＼／」

「ちよっ！？あんた！熱でもあるんじゃないの！？」

そう言いながらアリサさんがおでこを当ててきた。

おでこが当たってるという事は顔が近くになるわけで…

「むきゅ…／＼／／」

アリサさんの顔が近くにあり、僕は恥ずかしすぎて倒れてしまった

「あれ？陽太？ねえ！？陽太！？」

アリサさんが僕の名前を呼び続ける。

ああ、やばい。意識が朦朧としてきた……

僕はそのまま意識を手放した。

「《主！起きて！》」

ルナの念話で目が覚める。

あ、そうか。確か僕は気絶して…

「《主！急いで！》」

さっきから念話でルナが叫んでいる。

「「どうしたんですか……」」

隣で寝ているアリサさんやすすかさんを起こさないために念話で返す。

一体何があった。

「《主が気絶してる時にジュエルシードの反応が出たの！

そしたらなのはちゃんが飛び出して…》」

そう聞いた瞬間、俺は部屋から飛び出していた。

「この先にいるんですか!？」

僕は今、なのはさんに追い付くために森の中を走っていた。

《うん!でも……》

ルナが口籠る。

どうしたんだ？

《なのはちゃんとは他に2人の魔法使いの気配がするの》

「なんだって!?!」

という事は前になのはさんが話していた黒いバリアジャケットの女の子もいるのか…
でももう一人つて…

「また会ったな」

「《っ!?!》」

いきなり声をかけられ、足を止める。
声がした方を見るとそこには

—— 今日お風呂場で会った月光さんがいた

「え? な、何で……」

「何故驚く? あの時おまえも感じていただろ?」

感じていた?

一体何の事だ?

「その顔ではよくわかっていないようだな

—— なら感じさせてやろう…… セットアップ」

その言葉と共に月光さんが輝きだす。

光が晴れると

白いジャケットに黒いアンダーシャツ、さらに白いロングズボンと
いった

白をメインとしたバリアジャケットを着た月光さんがいた。
背中には蒼白く輝く翼、そして手には白銀の鎌。

僕はそれを見て、

——動けなくなっていた……

「今宵は良い月が出ている……」

さあ、俺と戦おう！望月陽太！」

月光さんの声で意識を戻す。

すると目の前には鎌の刃が僕に迫っていた。

「くっ！」

それをギリギリの所でかわす。

しかし肩を少し切られてしまった

「ほう、かわしたか…」

まあ、かわせるように手加減したのだから当たり前だろう」

「く、ルナ！セットアップ！」

月光さんの言葉にカチンとしながらもセットアップする。

「食らいやがれ！『フレイムテンペスト』っ！！」

すかさず月光さんに攻撃を放つ。
しかし…

「その程度か…」

……『ブリザードウォール』」

月光さんの周りに白い吹雪が吹き、攻撃が遮られた。

「その程度で俺に勝てると思っているのか！」

「舐めるなあ！！！」

今度は連続で炎を放つ。

しかしさっきの技で全て遮られてしまった。

「今度は俺の番だ！」

そう言うと同時に翼をはためかせ、空へと飛ぶ。
そして俺に刃を向け…

「『アブソリュートストライク』！！！」

高速で俺の所に近づいてきた。

剣で防ごうとするが間に合わない！

いつの間にか俺は地面に倒れていた。

「……………」

月光さんは無言で俺を見降ろし、黙っている。

……俺は負けたのか？

そんな事を考えていると月光さんが口をひらいた

「どうやら向こうも終わったようだ…

貴様の連れの魔法使いの負けという形で」

…なのはが負けた？

う、嘘だ。嘘に決まってる！

「…う……しゃ……る……」

声がつまく出ない。

「無理をするな。痛みで声が出ないのだろう

…安心しろ。貴様の連れに怪我はない。俺の連れがつまくやったのだろう」

怪我をしてない…のか
良かった。

「自分の心配よりも仲間の心配か……
面白い奴だ」

そう言うとき月光さんは背中を向けて去って行った。

「《主…大丈夫？》」

ルナが俺に念話で話しかけてくる。
心配掛けまいと念話で返してやる

「「ああ、少し休むよ……もしかしたらなのはが拾って行ってくれるかもね」」

冗談を言いつつ、

「「それじゃ……お……やすみ……」」

俺は意識を手放した。

「陽太side end」

「月光side」

とある木の陰で俺は脇腹を押さえていた。

《どうしました！？主様！？》

「何、さっきの戦闘でやられただけだ」

《さっきの戦闘……でも確かにあの一撃は反応できてませんでしたよ！？》

そう……確かにラルの言う通り、陽太が反応できない速度で切りつけた。
だが……

「あいつは無意識で俺に一撃を加えてたんだ……信じられないが……」

《そ、そんな……》

やはりあいつは——陽太との戦いは面白いものになるかも知れない。

その戦いにつれ……俺の中の何かがわかるかも知れない……だが

「——だがこれでフェイトに心配掛けるのも気が病む。少し休んでフェイトと合流だ。ラル」

《はい、主様》

今はとりあえず……月を眺めて休もう。

第8話 白銀の魔法使い…その名は「月光（げつこう）」（後書き）

ネガ「戦闘描写がテラヘタ……orz」

陽太「ま、まあまあ。気にしないで」

ネガ「うるさい、負け犬」

陽太「それはあんたがそう書いたからでしょう!」

ネガ「感想や指摘、ここをこんな風にすればいいんじゃない？
がある人は感想ください。ではまた次回!」

陽太「無視すんなあ!!!」（右ストレート）

ネガ「ほぶっ!」

番外8話 戦いの後の月光（前書き）

ネガ「やっちゃったぜ！何！？番外8話って！？笑えるwwww」

月光「8話の後で俺の話を書こうとして書かなかったから
番外編にして書こうとしたのだろう？」

ネガ「何だ……陽太よりも強くかつこ良いのに突っ込みが無いとは
……」

これが強者が……」

月光「さあ、始めるぞ」

ネガ「スルーまで……泣きたい……
では短いけど番外編？始まります」

番外8話 戦いの後の月光

月光は望月陽太との戦いで怪我を負い、木の陰で休んでいた。

「しかしあのタイミングはすごいな……ちょうど俺が切りつける瞬間とは……」

月光は休むなりさっきの陽太との戦いを思い出し、夢中になっていた。

戦い方はともかく

陽太の気迫、意思に月光は深く興味を持っていた。

何があいつをそこまでさせるのか……

やはりあの女の子か？

あの女の子が負けたと伝えた瞬間、あいつの気迫がさらに増した。まだ本気を”出せていない”のなら……

「——ならいつか……」

本気のあいつと戦いたいと月光は思った。

「月光！、こんな所にいたのかい！」

月光がそんな事を持っているとアルフが茂みから出てきた。とっさに月光は立ち上がる。

立ち上がると共に脇腹に激痛が走ったが月光は顔に出さなかった。

「アルフか……迎えに来てくれたのか……」

「あたりまえだよ。いくら待っても戻らないから心配してたんだよ？」

……心配させてしまったか、と誰にも聞こえない声でポツリとつぶやいた

「早く行こう。フェイトも心配して待ってたから」

アルフはそう言うたスタスタと歩きだした。

「ああ、今行く。」

これ以上心配させない為に痛みを我慢する。

歩いていると……

「そういえば月光が探してた奴には会えたのかい？」

不意にアルフが話しかけてきた。

「あ、……ああ、会えた……っ」

だが喋ろうとすると激痛が走った。

月光は痛みには耐えながら答える。

だが耐えきれなかったのか体制を崩してしまう。

「げ、月光！？大丈夫かいっ！？」

「し、心配ない。ただめまいがただけだ」

心配するアルフに月光は誤魔化す。

今心配かける訳にはいかない。

フェイトはジュエルシード集めを頑張っている。

もし俺が倒れたら優しいフェイトの事だ。

きつと無茶をしてまでも一人でジュエルシードを集めるに違いない

歯を食いしばり立ち上がる。

「早く戻ろう。」

そう言い、歩き出す。

痛みなど知るか。

フェイトは辛くても頑張っている。

だから俺も

「頑張らなくては……な……」

アルフやラルに聞こえないように月光は静かな森の中で呟いた……

…。

番外8話 戦いの後の月光（後書き）

月光「話が見事に飛んでいるな」

ネガ「ごふっ！」（月光の言葉の右ストレートが炸裂）

月光「しかもフェイトが出ていない。これでは読者もがっかりではないか？」

ネガ「ごぱっ！」（月光の言葉のボディプレスが炸裂）

月光「それに今回の小説の書き方も少し変わっていた」

ネガ「それはこっちの方が読みやすいかなあゝって」

月光「なら最初からそうすればいいだろう？」

ネガ「……………」（月光の以下略により消沈）

月光「それでは今回の書き方が良かったかいつも通りでかまわないか教えてほしい」

ネガ「うっ…………では指摘や気になる部分がありましたら感想ください。

では…………ごきげん…ようっ」（がくっ）

第9話 陽太の戸惑い。ジジイの特訓（前書き）

どうもブレイブマン、真の名をネガです。

タイトルってムズイですよね……

関係ない話は置いていて、では9話始まります。

第9話 陽太の戸惑い。ジジイの特訓

とある日の夕方

望月陽太はジジイと特訓をしていた。

「動きが鈍い！そんな事ではまた負けてしまっぞっ！」

そう言いながらジジイは手加減無しで陽太に拳を叩きこむ。

何故こんな事になったかというところ……

「どうしたんじゃ、最近元気がないぞ？」

学校から帰ってくるとジジイからこんな事を言われたのが始まりだった。

確かに陽太はこの前の旅行で出会った少年——月光に負けてから元気がなかった。

さらになのはも陽太が戦っている時に例の魔法使いに負けたらしい。その日からのには元気が無く、アリスも元気が無いのはを怒鳴ってけんかになってしまった。

だがなのは達はけんかしてもすぐ仲直りすると陽太は確信していた
なぜなら約2年くらいクラスの風景を眺めてたらわかる事だ。

けれど陽太は心のどこかで嘆いていた。

あの時僕が勝つていれば…あの時なのはさんの元へ駆けつけてれば…

—— みんなが暗い顔をしなくてすむのに…

その事ばかりで陽太は家でも暗い顔をしていた。

そんな陽太を見かねたのかジジイが話しかけた。

陽太も最初は何でもないと答えたが……

「何でもなければそんな顔するか、わしに言ってみ？」

と言われ、白状することにした。

魔法うんぬんは抜かして、

とある少年に負けてしまった事。

友だち（なのはの事）を守れなかった事。

みんな（なのは達の事）の事を暗い顔にさせてしまった事。

それらをジジイに白状した。

それを聞いたジジイは……

「ちょっと庭で待ってなさい」

と言い残し、居間を出て行ってしまった。

陽太は戸惑うがとりあえず庭に出る。

そして数分後……

「——イイイーヤツツツホオオ〜っ！！！」

そんな声と同時にジジイが二階の窓から飛び出してきた。
そのままジジイは拳を構えて、驚いて動かない陽太に拳骨を喰らわした。

「〜〜っつつつたい！！何のつもりですか！？」

殴られた頭を押さえながらもジジイに激怒する

「何じゃ、人がせつかく特訓してやろうとしたのに……」

「と、特訓？」

陽太はわけがわからなくて変な声を出してしまった。

「そうじゃ！陽坊は強くなりたいんじゃないじゃろっ？」

「まあ、そうだけど……」

「ならわしが鍛えてやるわい！そこら辺のヤンキーも恐れるほどにな！」

強くなる方向が違っようなベクトル……

と陽太は思いながら額に手を当てる。

しかし陽太の思う通りただの喧嘩と魔法使い同士の戦いは次元が違う。

だがジジイが教えるのは喧嘩の仕方では無かった。

それは……

「はあ！？瞬発力の特訓！？」

「そうじゃ、どうせおまえは相手の攻撃の速さに着いて行けず、もろに喰らったのだろう」

「（凶星すぎて何も言えません……でも何故それを知って？）」

いくらなんでも虫が良すぎる。

負けた理由は確かにそれだがジジイにはそれを喋ってはいない。一体どういう事？

「おまえは喧嘩なんてやった事が無いのに

喧嘩するから拳の速さに着いて行けんのじゃ」

……そんな理由かい……

確かに喧嘩なんてした事無いけどそんなもんなの？

「だからわしの拳を5回中一回でもいいからかわせ。寸止めするか安心してよいぞ」

そついう事ならと思い、陽太は構える。

「ほづ………」

お互いに睨み合う。

そしてジジイが動き出す。

それに合わせ陽太も回避行動をとる。

しかし気づくといつの間にか陽太は地面に倒れ込んでいた

「っ!？」

陽太は何が起きたのかわからず、起き上がり周りを見渡す。
あるのは投げ飛ばしたと思われるジジイの不敵な笑みだった。

「くつくつく、その慌てっぷりwww」

笑うジジイにイラッとし、今度は陽太が殴りかかった。
しかし、拳は空を切り、逆に陽太が後ろから殴られた。

「（な、いつの間に……）」

陽太は殴られた事では無く、いつの間にか背後を取ったジジイに驚いていた。

「悪い悪い、寸止めするのを忘れたわいwww」

陽気に笑い謝罪するジジイに陽太は気になる事を聞いた。

「いつの間に後ろにいたんですか？」

「ん？実は神速という技を使う奴がおつてな？
そいつの技を見てアレنجシして盗んだだけじゃ。
あやつはわかってないじゃろうがなwww」

聞くんじゃなかった…と陽太は心底思った。

陽太の祖父は大体の事をなんとなくで全部こなしてしまう人だった。
しかし陽太にとっては好都合だった。

「ジジイ……頼む」

「ん？」

「僕を……鍛えてくれっ！」

陽太はジジイに頭を下げた。
そしてジジイは……

「こんのバカ孫がああ！！」

「ふっ！！」

——陽太にアップパーを繰り出した。

「何するんですかジジイ！」

いきなりやられた攻撃に怒り、ジジイを怒鳴る。

するとジジイは優しい顔で陽太を見つめ、

「家族に頭下げてる暇があるならさっさと来ぬか」

そう言い、また構えだした。

どうやら陽太の願いを聞き入れるらしい。

「……ありがとう」

小さくお礼を言い、陽太はジジイに拳を放った。
その時の顔は太陽のように輝いていた。

「198……199……200…よし」

とある公園の中………月光は日課の鍛錬をしていた。

「ラル、今何時かわかるか？」

《午後4時50分です。主様》

「そうか………なら次は走るか………」

そう言い、走る体制をとり走ろうとした時、

「月光？」

名前を呼ばれ、後ろを振り返る。

そこには木に寄りかかったフェイトがいた。

「どうしたフェイト。もう飯を食べたのか？」

そう聞くとフェイトは首を横に振る。

月光はまたか、と頭を抱えた。

「なら……ジュエルシードか？」

「うん、大まかな位置特定は済んでるから」

「わかった……すぐに行く」

月光はそう言々と自分達の住む部屋に戻る事にした。

戻る直前にフェイトが

「ごめんね……巻き込んだじゃって」

と月光に言う。

「（謝る事ではない……）」

フェイトの言葉に答えず、心の中で返事をした。

「（頼むから謝るなフェイト。俺は俺の意思でここにいます）」

月光はそう思いながら空を仰いだ。

第9話 陽太の戸惑い。ジジイの特訓（後書き）

ジジイの特訓の成果はたった数分で出るのか!?

それは神のみぞ知る。

では感想やら色々ありましたらください。
容赦なく。では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9608t/>

魔法少女リリカルなのは ～太陽龍とブレイヴ～

2011年10月9日00時22分発行